

〔症例報告〕 松本歯学 27 : 132~139, 2001

key words : 成人女性 - 過剰歯 - 下顎 - 小白歯

下顎小白歯部過剰歯と文献的検討

加納 隆

松本歯科大学 口腔解剖学第1講座

野村 寿男, 佐野 雄三

長野 県

鷹股 哲也

イーストマン・デンタル・インスティテュート

Supernumerary Teeth in Lower Premolar Regions and a Review of the Literature

TAKASHI KANOH

Department of Oral Anatomy I, Matsumoto Dental University School of Dentistry

TOSHIO NOMURA and YUUZO SANO

Nagano prefecture

TETSUYA TAKAMATA

Matsumoto Dental University London Clinic Eastman Dental Institute, University of London

Summary

We report a 26-year-old Japanese female with a supernumerary tooth in the right and left premolar regions of the mandible. In addition, we compared this case with cases reported by other researchers of the same supernumerary tooth. These bilateral teeth erupted lingually between the second premolar and first molar in the mandible. They were perfectly erupted. Their crown color resembled that of permanent teeth and their roots were fully formed. X-ray examination revealed clear pulp cavities. Morphologically, these supernumerary premolars resembled permanent premolars. These teeth were smaller than the patient's own premolar teeth. Although erupted supernumerary teeth can be found in any region of the mandible, the frequency of occurrence differs from region to region. However, this case, with bilaterally symmetrical supernumerary teeth in the lower premolar regions of an adult female, rarely occurs in permanent dentition.

緒 言

歯科臨床上、歯の形態異常、歯数異常を示す症例に遭遇することがある。このうち歯数の異常には不足と過剰があり、不足の方が多く、過剰は少ないとされている^{66,69}。また、多数の過剰歯がみられるものとして、鎖骨頭蓋異形成症 (*Cleidocranial dysplasia*) の報告がある^{29,51}。しかし、全身的疾患の認められない健常人においても過剰歯の存在は多数報告されている^{66,69}。日本人における過剰歯の好発部位は上顎切歯部、上顎大臼歯部であり、下顎小臼歯部は比較的少ないとされている^{3,8,66}。今回我々は日本人成人女性で、下顎小臼歯部舌側に左右対称的に各1歯完全萌出する過剰歯を有する1例を経験し、若干の知見を得たので、文献的考察を加え報告する。

材料および方法

平成11年6月に歯科医院を受診した女性患者(26歳)において、口腔内診査およびX線診査により過剰歯と診断され、抜去された過剰歯を対象とした。あわせて、著者らが出来る限り調査した先人の報告例のうち、日本人についての報告例で、埋伏過剰歯を含まない報告例のみに限り、比較検討の対象とした。

また、患者の同意を得た上で過剰歯の因果関係を調査するため既往歴、家族歴、全身および口腔外所見について問診、診査した。

所 見

1. 口腔内所見：咬合関係は、Angleの第1級、軽度の離開咬合(開咬)を示すが、異常嚥下癖および吸指癖による高口蓋は認められない。上顎歯列では、左側第三大臼歯は未萌出であり、右側第三大臼歯は萌出している。左側側切歯は約35°近心に捻転しており、右側側切歯では約40°同様に近心に捻転している。一方、下顎歯列においては、左右側第三大臼歯は埋伏状態であり、萌出していない。パノラレントゲン写真により、未萌出の上顎左側第三大臼歯、下顎右側第三大臼歯、下顎左側第三大臼歯の存在が、確認される。(Figs.1 and 2)。

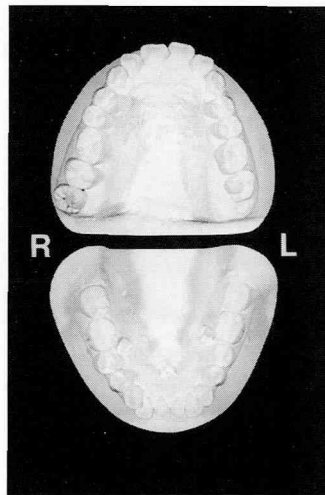


Fig.1 : Oral view of the present case.

R : Right side

L : Left side

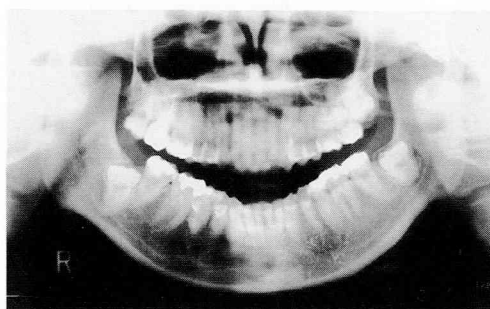


Fig.2 : Panoramic X-ray photograph

1) 過剰歯所見

今回観察した過剰歯は、左右側ともに第二小臼歯の遠心舌側で、かつ第一大臼歯の近心側の舌側に位置する。左右過剰歯とも第二小臼歯には接触せず、第一大臼歯の近心舌側咬頭直下の歯頸部に接触している。左側過剰歯は、歯列に対して約50°近心方向に捻転し、遠心隣接面が接触する。右側過剰歯は、歯列に対して約90°遠心方向に捻転し、近心頬側隅角部が接触する。

左右側過剰歯ともに萌出状態は、完全萌出である (Figs.3 and 4)。過剰歯の歯冠周囲には、軽度の歯石沈着と歯肉発赤が観られる。歯冠の色調は永久歯と類似している。

2) 下顎小臼歯所見

左右側第一小臼歯は頬舌側二咬頭で、舌側咬頭の発育は悪く、犬歯化が著明に認められる。特に

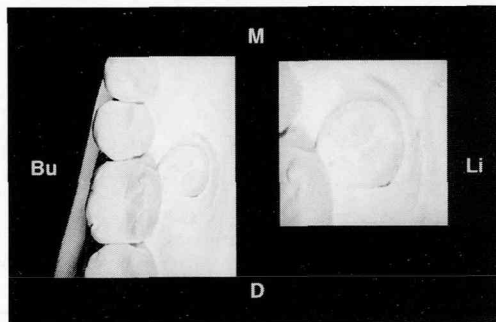


Fig.3 : Plaster cast of the mandibular premolar region, left side

M : Mesial side
D : Distal side
Bu : Buccal side
Li : Lingual side

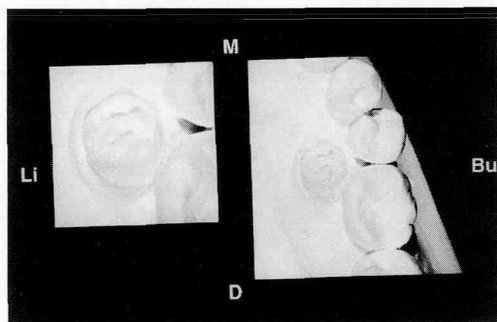


Fig.4 : Plaster cast of the mandibular premolar region, right side

M : Mesial side
D : Distal side
Bu : Buccal side
Li : Lingual side

頬側・舌側三角隆線が合した連合隆線は、一直線をなし発育が良い。舌側からは近心舌面溝が認められる。右側第二小白歯は、歯列弓に対して僅かに頬側に転位している。また、左右側の第一・第二小白歯（石膏模型上）の計測値は、上条²³⁾、藤田⁷⁾の平均値と比較すると、頬舌径、近遠心径ともに大きな値を示した (Table 1)。

2. 抜去歯所見:

1) 左側過剰歯

大きさは、歯牙全長17.61 mm, 歯冠長6.41 mm, 歯根長11.33 mm, 頬舌径7.09 mm, 近遠心径7.05 mmである。上条²³⁾、藤田⁷⁾の平均値と比較すると、歯牙全長, 歯冠長, 歯根長, 頬舌径ともに小さな値を示したが、近遠心径は、上条²³⁾の第二小白歯, 藤田⁷⁾の第一小白歯と同程度の大き

Table.1 : Measurement of lower premolar teeth and extracted supernumerary teeth. (mm)

	Total length	Crown length	Root length	Buccolingual distance	Mesiodistal distance
Sp-L	17.61	6.41	11.33	7.09	7.05
4 (Study cast)	-	-	-	8.12	7.63
5 (Study cast)	-	-	-	8.97	7.93
Sp-R	16.63	6.49	10.17	7.13	6.35
4 (Study cast)	-	-	-	8.51	7.81
5 (Study cast)	-	-	-	8.81	7.88
4 (Fujita ⁷⁾)	20.8	8.4	12.5	7.7	7.1
5 (Fujita ⁷⁾)	20.7	7.7	13.0	8.3	7.4
4 Female (Kamijo ²³⁾)	20.72	7.77	13.10	7.61	6.88
5 Female (Kamijo ²³⁾)	20.36	7.00	13.11	7.99	7.05

- : Measurement is impossible.
Sp-L : supernumerary tooth of left side.
Sp-R : supernumerary tooth of right side.

さを示した (Table 1)。

咬合面観は、咬頭は三咬頭(頬側咬頭, 舌側咬頭, 副咬頭)に分類される。咬合面裂溝形態は、Y型であり、第二小白歯に類似しており定型歯に分類される。歯根の彎曲は、近心舌側方向に根尖側1/2より彎曲しているのが観察される (Fig. 5)。

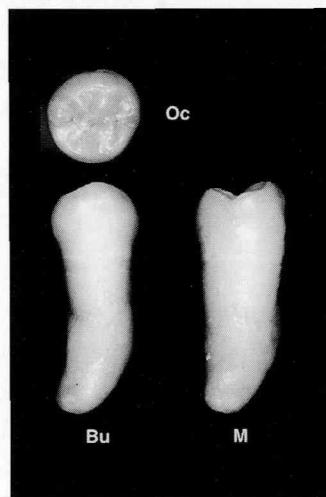


Fig.5 : Supernumerary tooth of the left side.

Oc : Occlusal view
Bu : Buccal view
M : Mesial view

2) 右側過剰歯

大きさは、歯牙全長16.63 mm, 歯冠長6.49 mm, 歯根長10.17 mm, 頬舌径7.13 mm, 近遠心径6.35 mmである。上条²³⁾、藤田⁷⁾の平均値と比較すると、歯牙全長, 歯冠長, 歯根長, 頬舌径,

近遠心径ともに小さな値を示した (Table 1).

咬合面観は、中央溝に相当する部分が中心 (中央) 結節が存在する以外は、頬側・舌側咬頭の二咬頭で、頬側咬頭に比較し舌側咬頭の発育の悪く、第一小白歯に類似しており定型歯に分類される。歯根の彎曲は、遠心頬側方向に根尖側 1/2 より軽度に彎曲しているのが観察される (Fig. 6).

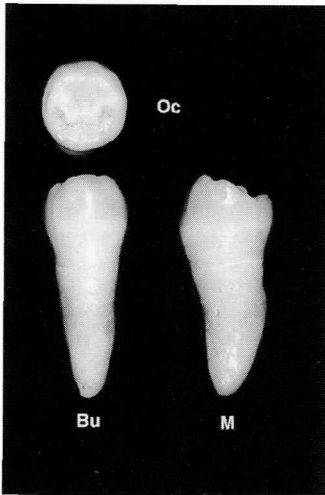


Fig.6 : Supernumerary tooth of the right side.
Oc : Occlusal view
Bu : Buccal view
M : Mesial view

3) X線所見 (Figs. 7 and 8)

左右側過剰歯の歯根は完成されており、明瞭な

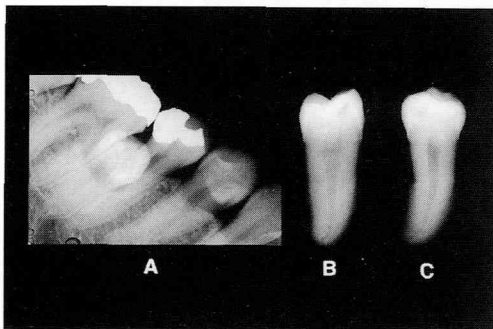


Fig.7 : Dental X-ray photographs.
A : Left side lower premolar region.
B : The extracted supernumerary teeth of buccal view.
C : The extracted supernumerary teeth of mesial view.

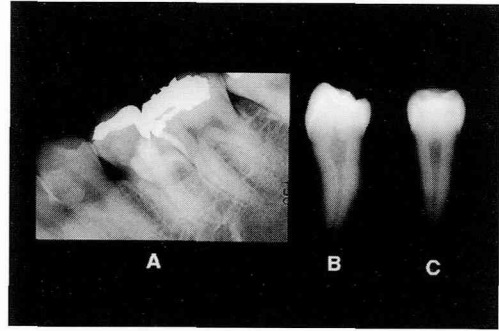


Fig.8 : Dental X-ray photographs of the extracted supernumerary tooth.
A : Right side lower premolar region.
B : The extracted supernumerary teeth of buccal view.
C : The extracted supernumerary teeth of mesial view.

歯髓腔も観察される。根管は左右側ともに単根管と推測される。歯槽骨に釘植している部位で歯根の肥大が見られる。左右側ともに釘植している歯槽骨辺縁付近から歯根の彎曲が生じているように推測される

3. 臨床的所見：既往歴，家族歴，全身および口腔外所見について，特記すべき事項は認められなかった。

考 察

過剰歯とは、上下顎各歯種の歯数より多いものをさす。過剰歯は、特に上顎前歯部および上顎白歯部に多く出現する傾向がある^{35, 66, 78, 79)}。しかし、下顎小白歯部での過剰歯は比較的まれであるとされている。著者らが出来る限り調査した日本人報告例では、下顎小白歯部過剰歯の出現頻度について、今村¹⁹⁾は、29,764名中1例 (0.0034%)、松本³⁵⁾は、27,475名中1例 (0.0036%)、山田⁸⁸⁾は、6,748名中2例 (0.030%)、筒井、吉田⁸³⁾は、1,454名中1例 (0.069%)、岡本ら⁵⁷⁾は、81,231名中11例 (0.014%)、遠藤⁹⁾は、48,800名中2例 (0.0041%) であり、調査人数、調査対象に違いはあるものの、平均すると1万人に1人の割合で極めて稀である。

我々が得た143例の日本人下顎小白歯部過剰歯の報告例^{1, 68, 70, 93)}の内、本例と同じような萌出過剰歯のみの80例について舌側，歯列内，頬側に分類した (Table 2)。舌側に出現するものは68例

Table.2 : Classification by the part of the erupted supernumerary teeth in lower premolar regions

Location	Classified	Sex	Author (Year)	
Lingual side [68]	Right or left side [36]	Male [23]	Mori, Nagane (1930) ³⁸ , Nagane (1930) ⁴⁰ , Tochiyama (1935, 1936) ⁷⁸⁻⁸¹ , Kamihara (1939) ²² , Hirakawa (1940) ¹⁵ , Sekiten (1941) ⁶⁸ , Sakata (1949) ⁶⁵ , Aragaki (1950) ¹ , Sagara (1953) ⁶⁴ , Hayashi, Tanaka (1954) ¹⁴ , Nishijima, Onda (1958) ⁴⁹ , Okamoto <i>et al.</i> (1973) ⁴² , Tada <i>et al.</i> (1981) ⁷³	
		Female [13]	Tochiyama (1935, 1936) ⁷⁸⁻⁸¹ , Imamura (1939) ²⁰ , Hosaka, Arakawa (1940) ¹⁷ , Torikai (1940) ⁸² , Yamada, Suganuma (1940) ⁸⁷ , Kawahara <i>et al.</i> (1956) ²⁵ , Tsubota (1958) ⁸⁴ , Kumaya, Tako (1963) ³¹ , Okamoto <i>et al.</i> (1963) ⁵⁷ , Nakakuki (1973) ⁴²	
	Both sides (asymmetry) [21]	Male [16]	Hisaami (1934) ¹⁶ , Ohkubo (1937) ⁵⁹ , Okamoto (1940) ⁵⁵ , Kimura (1944) ²⁶ , Kobata, Saka (1950) ²⁸ , Ohno (1956) ⁵⁸ , Nakashima (1957) ⁴³ , Yamada <i>et al.</i> (1960) ⁹⁰ , Okamoto <i>et al.</i> (1972) ⁵⁶ , Gotoh <i>et al.</i> (1973) ¹⁰ , Nosaka <i>et al.</i> (1976) ⁵⁰ , Ijiti <i>et al.</i> (1979) ¹⁸ , Tada <i>et al.</i> (1981) ⁷³ , Yokobayashi <i>et al.</i> (1983) ⁹² , Takeda <i>et al.</i> (1985) ⁷⁵ , Fujimura <i>et al.</i> (1988) ⁶	
		Female [5]	Takada, Takada (1955) ⁷⁴ , Takeuchi <i>et al.</i> (1958) ⁷⁶ , Okada, Kimura (1962) ⁵⁴ , Gotoh <i>et al.</i> (1973) ¹⁰ , Hata <i>et al.</i> (1983) ¹²	
	Both sides (symmetry) [11]	Male [10]	Enishi (1933) ² , Mitani (1940) ³⁶ , Ohkubo (1940) ⁶⁰ , Kondoh, Tobe (1952) ³⁰ , Karai (1955) ²⁴ , Sugimoto (1958) ⁷⁰ , Tsuneoka <i>et al.</i> (1958) ⁸⁶ , Sugimoto, Murakami (1959) ⁷² , Saeki <i>et al.</i> (1960) ⁶³ , Nosaka <i>et al.</i> (1976) ⁵⁰	
		Female [1]	This case	
	Intra dental arch [19]	Right or left side [8]	Male [6]	Hamano (1929) ¹¹ , Mori, Nagane (1930) ³⁸ , Nakai (1932) ⁴¹ , Tochiyama (1935, 1936) ⁷⁸⁻⁸¹ , Yamada (1965) ⁸⁹ , Nakakuki (1973) ⁴²
			Female [2]	Mori, Nagane (1930) ³⁸ , Yoshida (1953) ⁹³
		Both sides (asymmetry) [8]	Male [6]	Hisaami (1934) ¹⁶ , Kobata, Saka (1950) ²⁸ , Nakashima (1957) ⁴³ , Enomoto <i>et al.</i> (1965) ⁴ , Nosaka <i>et al.</i> (1976) ⁵⁰ , Takeda <i>et al.</i> (1985) ⁷⁵
Female [2]			Takenaka <i>et al.</i> (1958) ⁷⁶ , Hata <i>et al.</i> (1983) ¹²	
Both sides (symmetry) [3]		Male [2]	Odohi, Ohkubo (1939) ⁵² , Mitani (1940) ³⁶	
		Female [1]	Odohi, Ohkubo (1939) ⁵²	
Buccal side [8]	Right or left side [4]	Male [2]	Furuya, Nakano (1937) ⁹ , Yokobayashi <i>et al.</i> (1983) ⁹²	
		Female [2]	Mori, Nagane (1930) ³⁸ , Tochiyama (1935, 1936) ⁷⁸⁻⁸¹	
	Both sides (asymmetry) [4]	Male [3]	Kobata, Saka (1950) ²⁸ , Ohno (1956) ⁵⁸ , Nakashima (1957) ⁴³	
		Female [1]	Okada, Kimura (1962) ⁵⁴	
	Both sides (symmetry) [0]			

[] : Number of case reports for supernumerary teeth.

ともっとも多く、ついで歯列内19例、頬側8例で、歯列内と頬側に出現する過剰歯の合計の2倍以上、言い換えると70%以上が舌側に出現するもので、本例の所見とも一致する。つぎに、本例は両側で対称的に出現したが、舌側に出現する68例の報告のうち、片側に出現するものは、36例ともっとも多く、ついで、両側性で非対称的に出現するものが21例、両側性で対称的に出現するもの11例であり少数である。また、本例は女性であるが、男女比については、舌側に出現する68例中、男性49例、女性19例であり、2:1以上で男性に多い。言い換えると女性での出現率は、男性に比較し30%以下である。女性では、下顎小白歯部萌出過剰歯の出現率は、平均3万人に1人で、極めて稀である。なぜ女性の出現率が低いのか理由は明らかではない。

一般的に正常な歯の形態に類似しているものを定型歯とし、円錐形、棒状、蕾状などの正常な歯に類似しないものを非定型歯としている。我々が得た萌出過剰歯のみの80例について、定型歯と非定型歯に分類すると、定型歯114歯、非定型歯44歯で、本例と同じような、定型歯は全体の70%を占めている。

本症例は、萌出部位が舌側で、左右対称的な両側性の定型歯で、しかも女性である。Table 2に示すように本症例は、調査した限りでは日本人としては最初である。

結 論

本症例は、

1. 日本人成人女性の下顎小白歯部両側性の過剰歯である。
2. 過剰歯の数は、左右対称的に各1歯ずつ完全萌出していた。
3. 過剰歯の萌出位置は、第二小白歯遠心で第一大臼歯の近心の舌側である。
4. 過剰歯の形態は、定型歯であり、歯根は完成されていた。
5. 萌出部位が舌側で、左右対称的な両側性の定型歯で、しかも女性である報告は、調査した限りでは日本人としては最初である。

謝 辞

稿を終わるに臨み、ご指導を賜りました井上勝

博教授に深謝いたします。また、ご協力いただいた方々に謝意を表します。

本論文の要旨は第49回松本歯科大学学会(例会)(1999年11月13日)において発表した。

文 献

- 1) 荒垣一郎(1950) 3個の下顎歯列舌側萌出小白歯過剰歯の症例. 歯科学雑誌 7: 500-2.
- 2) 江西甚良(1933) 成人の上下顎小白歯部に相対的に発見せる過剰歯の一例に就きて. 歯科月報 13: 23-5.
- 3) 遠藤至六郎(1973) 新編口腔外科診断学. 復刻版, 653-61. 医学書房, 東京.
- 4) 榎本明義, 畑島洪基, 森戸純康, 大津信治, 鶴田基資, 陶山 達, 松尾 繁(1965) 多数の過剰歯を有する2症例. 九州歯会誌 19: 119-23.
- 5) 江良謙次, 公平喜啓, 安川和夫, 柴田 肇, 吉沢信夫(1983) 下顎小白歯部に対称性に出現した多歯症の1例. みちのく歯学誌 14: 147-8.
- 6) 藤村 朗, 大滝 洋, 横須賀 均, 伊藤一三, 野坂洋一郎(1988) 下顎小白歯に両側性に出現した過剰歯の二例. 岩医大歯誌 13: 52-60.
- 7) 藤田恒太郎(1976) 歯の解剖学. 改訂第21版, 55-62. 金原出版, 東京.
- 8) 藤原匡人, 黒瀬邦彦, 中津継夫, 花田孝二, 平川康一, 若狭 亨, 吉原史郎, 小松久高, 岸 幹二(1987) 過剰歯の臨床的X線学的検討. 歯放 27: 161-6.
- 9) 古谷俊忠, 仲野武雄(1937) 過剰歯牙の高齢に於て萌出せる1特異例に就て. 駿台歯科医報 6: 11-6.
- 10) 後藤啓爾, 堤 直文, 森永 侃, 柿原康男(1973) 小白歯部過剰歯の3症例について. 九州歯会誌 26: 421-5.
- 11) 濱野松太郎(1929) 稀有なる下顎第三小白歯の一例並に極めて稀有なる女性に発現せし第四大白歯の一例. 日本之歯界 118: 783-5.
- 12) 畑 良明, 南出千景, 菊池正修, 池田浩之, 長滝 敬, 須田正文, 吉本壮平, 岡田泰紀(1983) 両側下顎小白歯部過剰歯の一例. 東日本歯誌 2: 71-7.
- 13) 早川廉三(1939) 下顎両側過剰歯及び埋伏過剰歯の特異例に就て. 臨床歯科 11: 1194-7.
- 14) 林 芳雄, 田中建吾(1954) 下顎小白歯複過剰歯の一例. 歯科学報 54: 319-20.
- 15) 平川正輝(1940) 下顎小白歯に2個の円錐形過剰歯の発生せる一例に就て. 九歯学報 4: 19-22.
- 16) 久網晃治(1934) 稀有なる下顎第三第四小白歯を有し同時に他の上下顎同名部に過剰歯を有す

- る一例。臨床歯科 **6**：1730-7.
- 17) 穂坂恒夫, 荒川幸喜 (1940) 第三小白歯に就て. 満州歯科医学会誌 **13**：50-5.
 - 18) 伊地知弘昌, 野淵秀孝, 薄 孝, 戸田忠夫 (1979) 3 歯の下顎萌出過剰小白歯がみられた 1 症例. 歯科医学 **42**：211-3.
 - 19) 今村 汎 (1927) 人類下顎過剰歯に就て. 歯科学報 **31**：375-6.
 - 20) 今村 汎 (1939) 人類過剰歯の 24 例に就て. 満鮮之歯界 **8**：456-65.
 - 21) 岩沢 易, 田中莊二郎, 田中俊三 (1963) 2 歯ずつ左右対称的に発生せる下顎過剰小白歯の 1 例. 日口科誌 **12**：198.
 - 22) 神原庄一郎 (1939) 過剰歯 4 例に就て. 京都歯科医学会誌 **3**：89-92.
 - 23) 上条雍彦 (1979) 日本人永久歯解剖学. 10 版, 93-112. アナトーム社, 東京.
 - 24) 加来義韶 (1955) 対称性に現われた下顎第 3 小白歯の 1 例. 九州歯会誌 **8**：107-8.
 - 25) 河原邑安, 西浦 恂, 窪 徹 (1956) 下顎小白歯部に現われた過剰歯の 1 例. 歯科医学 **9**：382-3.
 - 26) 木村 肇 (1944) 臼歯部に 6 個の過剰歯を有する稀有なる一症例. 歯科学報 **49**：204-6.
 - 27) 橋高寿一郎 (1959) 下顎小白歯部に現われた対称性第 3 小白歯の 1 例. 九州歯会誌 **13**：43-6.
 - 28) 小畑芳美, 坂 光夫 (1950) 小白歯部過剰歯の症例に就て. 臨床歯科 **191**：25-7.
 - 29) 小松利典, 武藤寿孝, 大木保秀, 小林 操, 高原利幸, 高原正明, 甲原玄秋, 今井 裕, 木村孝雪, 佐藤研一 (1986) 第 3 歯堤より発生したと思われる多数過剰埋伏歯の 1 例. 日口外誌 **32**：472-8.
 - 30) 近藤 正, 戸辺三千男 (1952) 下顎小白歯部に対称的に 2 個ずつ発生した歯数過剰歯の症例の 1 例. 歯科学雑誌 **8**：239-40.
 - 31) 熊谷秀雄, 多湖健治 (1963) 臼歯部過剰歯の 3 例. 北海道歯誌 **18**：29-30.
 - 32) 栗岡博良, 田中 広, 椿本九美夫 (1965) 下顎小白歯部における 3 個の過剰歯発現例. 歯科医学 **28**：564-7.
 - 33) 黒田洋生, 北條博一, 藤井正純, 辻準之助, 中井高文 (1972) 父と子にわたって上下顎左右側小白歯部に多数の歯数過剰を有する症例について. 歯科医学 **35**：928-37.
 - 34) 松本忠士, 内藤講一, 北島 正, 磯貝昌彦 (1983) 下顎小白歯部左右両側に 3 本の過剰歯を有する症例. 日口科誌 **32**：580-8.
 - 35) 松本一男 (1933) 人類の過剰歯に就いて. 朝鮮歯科医学会誌 **9**：7-18.
 - 36) 三谷 光 (1940) 人類小白歯部に発現せる稀有なる九過剰歯. 臨床歯科 **12**：217-22.
 - 37) 三輪 清 (1939) 稀有なる片顎片側に 3 個の小白歯発生の 1 例に就て. 日本之歯界 **237**：586-7.
 - 38) 森 忠男, 長根 龍 (1930) 人類の下顎小白歯部に発見せられたる過剰歯の 4 例に就きて. 日歯会誌 **23**：428-31.
 - 39) 村中秀利, 小泉勝彦, 小出秀二郎 (1962) 下顎左側臼歯部におけるいわゆる第 3, 第 4 小白歯の稀有なる 1 症例. 歯科医学 **25**：679-82.
 - 40) 長根 龍 (1930) 稀有なる下顎小白歯部過剰歯の 1 例. 日本之歯界 **126**：655.
 - 41) 中井俊次 (1932) 所謂第三小白歯の一例について. 臨床歯科 **4**：158-9.
 - 42) 中久木一乘 (1973) 小白歯部過剰歯の 3 例. 通信医学 **25**：543-6.
 - 43) 中島和徳 (1957) 下顎小白歯部に同時に 3 本の過剰歯を有する珍しい症例. 口病誌 **24**：379-84.
 - 44) 中郷安正 (1939) 三個の過剰小白歯並びに第四大臼歯を併有せる稀有なる症例に就て. 臨床歯科 **11**：845-53.
 - 45) 中村雅明, 平井治朗, 森永 太, 井上秀二郎, 亀山忠光, 朱雀直道 (1977) 下顎右側臼歯部に 3 個の過剰歯を有する 1 例. 日口外誌 **23**：171-4.
 - 46) 西牧修也, 菅野 寿, 岡田知子, 大内雅宣, 鈴木智子, 川崎建治 (1992) 左下顎小白歯部埋伏過剰歯と左右対称性に萌出した下顎小白歯部過剰歯の一例. みちのく歯誌 **23**：25-6.
 - 47) 西牧修也, 鈴木智子, 菅野 寿, 川崎建治 (1994) 下顎小白歯に 3 個の小白歯型過剰歯を有する 1 例. 日口科誌 **43**：649-52.
 - 48) 西井一郎 (1950) 下顎左側に現われた興味ある過剰歯の 1 例に就て. 倉敷中央病院年報 **21**：78.
 - 49) 西嶋 栄, 恩田一呂 (1958) 下顎左側小白歯部に叢生したいわゆる第 3, 第 4 小白歯の 1 症例. 歯科医学 **21**：698-700.
 - 50) 野坂洋一郎, 伊藤一三, 菅原教修 (1976) 下顎小白歯部に対称的に過剰歯の出現した 2 例ならびに文献的考察. 日口科誌 **25**：296-324.
 - 51) 落合靖一 (1961) 鎖骨頭蓋異骨症の歯科的所見. 口病誌 **28**：445-9.
 - 52) 小土肥信良, 大久保博 (1939) 対称性に萌出せる過剰第 3 小白歯の 2 例. 口病誌 **13**：60-3.
 - 53) 小川武裕, 武田泰典, 鈴木鍾美, 野坂洋一郎 (1985) 左右両側に出現した下顎の過剰小白歯の一例. みちのく歯誌 **16**：65-6.
 - 54) 岡田 孝, 木邑知義 (1962) 2, 3 の歯数異常症例について. 歯界展望 **19**：316-20.
 - 55) 岡本正介 (1940) 下顎小白歯の復化に就て. 京城歯科医誌 **8**：115-21.
 - 56) 岡本日出夫, 清水恒久, 音田清人 (1972) 小白

- 歯部過剰歯の2症例について. 歯科学報 **72**: 887-97.
- 57) 岡本 治, 斎藤光正, 今井 悟, 藤川政男, 秋庭美津男, 岸田 実 (1963) 下顎における過剰歯16症例について. 歯科学報 **63**: 552-8.
- 58) 大野喜一郎 (1956) 対称性に現れた過剰歯の二例. 臨床歯科 **213**: 34-6.
- 59) 大久保 博 (1937) 両側性に萌出せる所謂第三小白歯の一例. 歯科月報 **17**: 266-9.
- 60) 大久保 博 (1940) 対称性に來たる第3小白歯補遺. 歯科月報 **20**: 254-5.
- 61) 太田俊介, 呉 修治 (1950) 下顎小白歯部において対称性に1個ずつの萌出過剰歯と同時に1個ずつの埋伏過剰歯を發現した1症例. 歯科学雑誌 **7**: 125-7.
- 62) 長田 保, 木本彌太郎, 戸村二郎 (1957) 小白歯部及び大白歯部に多数現れた過剰歯の1例. 口病誌 **24**: 93-5.
- 63) 佐伯栄一, 宮崎一雄, 矢毛石幸男, 角 勲, 河野好彦, 門司 健 (1960) 下顎小白歯部に各々2個両側性対称位置に萌出した過剰歯の一症例. 九州歯会誌 **14**: 662-3.
- 64) 相良好仁 (1953) 所謂下顎第3小白歯の2例. 歯科学報 **53**: 897-8.
- 65) 坂田通泰 (1949) 所謂下顎第3小白歯の1例について. 歯科学雑誌 **6**: 192-3.
- 66) 佐藤峰雄 (1937) 邦人に於ける歯數異常の研究 後編 過剰歯に於ける觀察. 日歯会誌 **30**: 77-104.
- 67) 佐藤貞勝, 小林淳悟, 天野琢也, 太田 寛, 北村晴彦, 四野宮澄子, 長内秀夫, 鶴田丞次 (1959) 永久過剰歯萌出の一考察. 日矯歯誌 **18**: 46-9.
- 68) 石天泰三 (1941) 下顎大白歯部に發現せる稀有なる過剰歯の一例. 臨床歯科 **13**: 623-6.
- 69) Stafne, E. C. (1932) Supernumerary teeth. Dent Cosm **74**: 653-9.
- 70) 杉本是孝 (1958) 下小白歯部に左右対称的に見られた過剰歯症の一例. 歯科学報 **58**: 114-6.
- 71) 杉本是孝 (1960) 下顎小白歯部に3個, 上顎白歯部に2個の過剰歯をもった1例. 日口科誌 **9**: 341-6.
- 72) 杉本是孝, 村上茂隆 (1959) 白歯部に見られた興味ある過剰歯の3例. 歯科学報 **59**: 419-22.
- 73) 多田 逸, 段野節郎, 樋口淳一, 伊藤和彦, 金命得, 李 炳漢 (1981) 下顎小白歯部に出現した過剰歯の2例. 歯科医学 **44**: 463-81.
- 74) 高田誠之助, 高田敬之助 (1955) 小白歯部に叢生せる所謂第三, 第四小白歯の一例. 臨床歯科 **209**: 35-6.
- 75) 武田泰典, 小川武裕, 野坂洋一郎 (1985) 左右両側性に出現した下顎の過剰小白歯の一症例. 岩医大歯誌 **10**: 202-10.
- 76) 竹内 茂, 下村源太郎, 林 勇, 浜野正男 (1958) 小白歯部過剰歯の二症例. 臨床歯科 **222**: 28-9.
- 77) 田崎 敬, 近藤健一, 女川 清, 三浦敏助 (1955) 下顎小白歯部に於て対称的に萌出した過剰歯の1症例. 歯科学報 **55**: 489-92.
- 78) 栃原義人 (1935) 白歯列過剰歯に関する研究 (其一). 歯科学報 **40**: 651-64.
- 79) 栃原義人 (1935) 白歯列過剰歯に関する研究 (其二). 歯科学報 **40**: 760-82.
- 80) 栃原義人 (1935) 白歯列過剰歯に関する研究 (其三). 歯科学報 **40**: 841-57.
- 81) 栃原義人 (1936) 白歯列過剰歯に関する研究 (其四). 歯科学報 **41**: 24-37.
- 82) 鳥飼 肇 (1940) 下顎小白歯部に群生せる過剰歯の一例. 日本歯科学会雑誌 **33**: 11-6.
- 83) 筒井英夫, 吉田幸子 (1955) 過剰歯と先天性欠如歯に関する臨床的統計觀察. 口病誌 **22**: 44-8.
- 84) 坪田不二雄 (1958) 下顎小白歯部に萌出をはじめた過剰歯について. 歯界展望 **15**: 1298-303.
- 85) 辻 三郎 (1960) 下顎小白歯部に三本の過剰歯を有する1症例とその考察. 阪大歯誌 **5**: 135-7.
- 86) 常岡春充, 諸熊正武, 大和屋李喜 (1958) 下顎小白歯部に発生した相対性過剰歯の一症例. 長崎医学会誌 **33**: 1372-5.
- 87) 山田 茂, 菅沼宣一 (1940) 稀有なる下顎第三小白歯の二例に就て. 臨床歯科 **12**: 471-6.
- 88) 山田 茂 (1941) 歯數並びに形態の異常が歯列, 咬合に及ぼす影響に就て. 臨床歯科 **13**: 160-83.
- 89) 山田幸彦 (1965) 下顎白歯部に現われた過剰歯の1例. 歯科医学 **28**: 412-3.
- 90) 山田 博, 空閑平治, 小住啓一, 浜田義彦 (1960) 下顎小白歯部に3コの過剰歯を有する稀有なる1例. 九州歯会誌 **14**: 670-3.
- 91) 安本弘濟, 佐藤 篤, 下條知信, 内藤義久, 木村義孝, 伊藤一三 (1997) 下顎小白歯部に両側性に出現した過剰歯の一例及び文献的考察. 奥羽大歯誌 **24**: 77-82.
- 92) 横林敏夫, 横林康男, 中島民雄, 吉田重光, 小林茂夫 (1983) 下顎小白歯部過剰歯の2症例. 新潟歯誌 **13**: 101-7.
- 93) 吉田幸子 (1953) 小白歯部過剰歯の1例. 日口科誌 **2**: 115-7.